



地人館 E-books
Compact

デモ版 pdf

浄土真宗を大宗派に育てた
蓮如上人の手紙

御文章（御文）

❖原文と現代語訳

田中治郎 著





田中治郎 (たなか じろう)

1946 (昭和 21) 年 宮城県生まれ

文筆家。日本ペンクラブ会員

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。

[主な著書] 『世界の地獄と極楽がわかる本』 『折れない心をつくる名僧の言葉』 (PHP 研究所)、 『よくわかる仏教入門』 『コミュニケーション力がUPするブッダの言葉』 (佼成出版社)、 『面白いほどよくわかる日本の宗教』 『面白いほどよくわかる日本の神様』 『面白いほどよくわかる浄土真宗』 (日本文芸社)、 『仏教のことが面白いほどよくわかる本』 『釈迦の教えが面白いほどよくわかる本』 (中経出版)、 『生き方を学ぶ仏教入門』 『禅の言葉 100』 『親鸞入門』 『歎異抄◆原文と現代語訳』 『修証義◆原文と現代語訳』 『一枚起請文◆原文と現代語訳』 (地人館 E-books) ほか多数。

ごぶんしょう おふみ 御文章 (御文)

著者 たなかじろう
田中治郎

初版発行 2022 年 6 月 30 日

発行 ちじんかん
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2022 Jiro Tanaka

はじめに

衰亡著しかつた本願寺を、一代で戦国大名に伍するほどの力を持つ大教団に育て上げたのは、八世の蓮如（一四一五～一四九九年）である。彼は手紙形式の法話を考案し、これを「御文章（御文）」と呼んで門徒との通信手段とし、おおいに活用した。これは一種の情報戦略であり、現代のIT革命のような効果をもたらしたと考えられる。

当時、各地の郷村では「惣」という自治組織が発達していた。蓮如は惣を利用して「講」という集まりを作り、道場とした。そして、それを構成する幹部の坊主（道場主）と年寄りと長（長老）とをパイプで結んで組織化した。

たとえ農家や商家などの俗人の家でも、講に名号本尊を与えればそこはりっぱな道場となり、各地方の幹部に「御文章（御文）」を配布すれば、彼らが集まった門徒たちにそれを読み聞かせ、法話をした。こうして各講の結束は強まり、講は各地方に広まっていったのである。

蓮如自身はこの文書を「おふみ」と呼んだようだが、時代が下って浄土真宗本願寺派（西本願寺）では「御文章」と呼び、真宗大谷派（東本願寺）では「御文」と呼ぶようになった。

真偽のわからないものも含めて二百二十一通あるといわれ、このうちの八十通をまとめて『帖内御文章（御文）』、それ以外を『帖外御文章（御文）』と呼んでいる。大永元年（一五二二）、蓮

如の孫の円如えんにょによってまとめられたという。ここでは『浄土真宗日常勤行聖典』に採られている代表的な御文章を紹介したほか、当時の蓮如が置かれた状況を反映する一通を取りあげた。それには題がないので仮に「三か条の戒め」とした。

蓮如と門徒たちとの交流の息吹を感じ取っていただければ幸いである。

田中治郎

【御文章（御文）】もくじ

はじめに

末代無智章

八万の法蔵章

信心獲得章

聖人一流章

白骨章

三か条の戒め

蓮如「信仰と戦い」

〔扉写真〕 多くの御文章が書かれた吉崎御坊跡の太鼓楼

第五帖第十六通

白骨章

はつごつのしやう

【原文】

それ、人間の浮生ふしやうなる相をつらつら観みずるに、おおよそはかなきものは、この世の始し中終ちゆうじゆう、まぼろしのごとくなる一期いちごなり。されば、いまだ万歳まんざいの人身にんじんを受けたりという事をきかず。一生いっしやうすぎやすし。いまにいたりてたれか百年ひゃくねんの形体ぎやうたいをたもつべきや。我われやさき、人やさき、きようともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すえの露つゆよりもしげしといえり。されば朝あしたには紅顔こうがんありて夕ゆふべには白骨はつこつとなる身なり。すでに無常むじやうの風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔こうがんむなしく變かじて、桃李とうりのよそおいをうしないぬるときは、六親眷属けんぐんあつまりてなげきかなしめども、更さらにその甲斐かひあるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外やがいにおくりて夜半よわのけふりとなしはてぬれば、ただ白骨はつこつのみぞのこれり。あわれとも中々なかなかおろかなり。されば、人間にんげんのはかなき事は、老少らうしやう不定ふじやうのさかいなれば、たれの人もはやく後生ごしやうの一大事いちだいじを心にかけて、阿弥陀仏あみだぶつをふかくたのみまいらせて、念仏ねんぶつもうすべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

【現代語訳】

さて、人間の浮き草のような姿をつくづく観察すれば、およそはかないものは、この世に生まれ、生き、死んでいくまぼろしのような一生です。いまだ一万年の身を受けたなどということは聞きませんし、一生はあつという間に過ぎてしまふものです。いま、だれが百年の肉体を保つことができましょうか。

私が先か、他人が先か、（私たちの命は）きょうともあすともわかりません。遅れて行く人も先立つ人も、木の根元のしずくや葉先の露が繁く落ちるよりも多いといわれます。（私たちは、）朝に若々しく血色のいい顔（紅顔）があると思っている、夕べには白骨となる身なのです。

無常の風が吹いてくれば、私たちの二つの眼（まなこ）はたちまち閉じ、ひとつの息も永遠に途絶えてしまいます。みずみずしい紅顔もむなしく変化し、桃（もも）や李（すもも）のような新鮮さも失われてしまったとき、親類中が集まって嘆き悲しんでも、なんの甲斐（かひ）もありません。

いつまでもそうしてはられないので、野辺（のべ）の送りをして夜半（よわ）に茶毘（たび）に付してしまえば、煙となつてただ白骨が残るのみです。それをあわれというのも愚かなほどつらいことです。

このように、人間のはかなさは、老少のさかきも定まつていないことなので、だれであれ、死後という一大事をこころに受け止め、阿弥陀仏を深く信じて念仏すべきです。

あなかしこ、あなかしこ。

*野辺の送り 遺骸を火葬場または埋葬場まで見送ること。のおくり、のべおくりともいう（広辞苑）。現在は霊柩車で遺骸を運ぶことが多く、これを見送ることをいうが、戦後間もないころまでは遺族や近隣の人々が役割を分担して墓場まで遺骸を運んだ。

*茶毘 サンスクリット語「ジャーペテイ」の音写語。遺骸を火葬すること。



吉崎御坊跡から望む入江（北潟湖） 向こうに日本海が見える。



地人館 E-books
Compact

田中治郎 (たなか じろう)

1946 (昭和 21) 年 宮城県生まれ

文筆家。日本ペンクラブ会員

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。

[主な著書] 『世界の地獄と極楽がわかる本』『折れない心をつくる名僧の言葉』(PHP 研究所)、『よくわかる仏教入門』『コミュニケーション力がUPするブッダの言葉』(佼成出版社)、『面白いほどよくわかる日本の宗教』『面白いほどよくわかる日本の神様』『面白いほどよくわかる浄土真宗』(日本文芸社)、『仏教のことが面白いほどよくわかる本』『釈迦の教えが面白いほどよくわかる本』(中経出版)、『生き方を学ぶ仏教入門』『禅の言葉 100』『親鸞入門』『歎異抄◆原文と現代語訳』『修証義◆原文と現代語訳』『一枚起請文◆原文と現代語訳』(地人館 E-books) ほか多数。

ごぶんしょう おふみ 御文章 (御文)

著者 たなかじろう
田中治郎

初版発行 2022 年 6 月 30 日

発行 ちじんかん
地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2022 Jiro Tanaka